

ヒロシマのトマート

ヒロシマを、わたし自身の「ことば」で

竹本 成徳
たけもと しげのり

はじめに

昭和二十年八月六日、午前八時十五分十七秒……。

一発の原子爆弾げんしばくだんの投下とうかで、広島ひろしまの町は一瞬いつしゆんにして廃墟はいきよと化しました。

その時間、わたしは爆心地ばくしんちからわずか一キロという広島市役所の建物の西側にある植え込みの中にいました。

「ピカッ、ドーン！」と、ものすごい光ともものすごい音がしたかと思うと、まわりは一瞬いつしゆんのうちにまっ暗になってしまいました。これまで、おおぜいの人ひとが広島について書いたり、語ったりしていますが、あのきのこ雲の下は、先が見えないほどまっ暗になってしまうということは、意外いがいに知られていません。

そのまっ暗やみの中を、わたしは何時間なにじかんも逃げまどいました。

逃げる途中^{とちゆう}で、死んだ人、大やけどをした人も数えきれないほど見ました。がれきの下のうめき声も聞きました。いまでもその声が耳の奥によみがえることがあります。

ごぞんじのように、広島^{ひろしま}の記録はたくさんあります。しかし、それですべてが語りつくされたかというところ、そうはいえませんが。

なおもわたしが、お話し^{はな}しておかなければならないと考えたのは、わたしの広島を、わたし自身の「ことば」で語らなければならぬ。わたしの「こころ」で語らなければならぬと思つたからです。

これは、その八月六日の、わたしが体験^{たいけん}したお話です。

もくじ

はじめに	2
一、昭和二十年八月六日	6
二、明治時代からの軍都、広島市	10
三、ピカッ、ドーン！	18
四、まっ暗になった街	23
五、がれきの下には、まだ生きている人が	28
六、巨大な雲の柱	33
七、見わたす限り、おそろしい地獄の光景	41

八． すみでからだに書く名前

九． おまえ、生きとったかあ！

十． さいごのトマト

十一． もっとも残酷ざんこくなことは

十二． 過あやまちは繰くり返かえりませぬから

おわりに

〈資料〉昭和二十年当時の広島市地図

47

53

60

65

71

74

78

一・昭和二十年八月六日

わたしは昭和六年八月二十二日、広島市西部の草津町（現在は広島市西区）というところで生まれました。いまでは周辺の町や村を合併して市域が広がっていますが、当時は、広島市内といつてもいちばん西の端に位置する町でした。

草津町は背後の山と瀬戸内海が接近したところで、海岸にせまるようにして山陽本線が走っています。すぐ目の前は穏やかな広島湾で、家から走っていけば、そのままドボンと海へ飛びこむことができました。

毎朝早くからポンポン船の音が聞こえます。天気の良い日には、わたしの家の二階からは日本三景のひとつ、安芸の宮島が遠望できました。

草津町は半農半漁の町でしたが、昔から広島の中央魚市場がありました

た。広島湾や伊予灘で獲れた近海魚が中央魚市場に水揚げされてきます。目の前の広島湾は、広島カキの一大養殖地としても有名なところでした。遠浅の海でしたから、冬は海苔の養殖もできました。アサリ、ハマグリという海産物にも恵まれています。かつては大小百三十軒ものカマボコ工場もありました。

わたしの家は畑の中の一軒家でした。ニワトリを飼っていましたが、卵に日付を書いて、大事に糲殻の中に入れて、ヒヨコに孵したりしていました。卵をお日さまにかざすと、中が透けて見えます。

「ああ、まだ血液ができていない。いつごろ孵るかな」

などといいながら待っているのが子どものころの楽しみのひとつでした。

家のまわりは田んぼと畑ばかりですから、夏休み、昼寝をしていると、そこらじゅうでキリギリスが鳴いているのが聞こえます。昼寝から目覚め

ると、トンボ釣りにいったり、カエルを捕りにいったりします。ウサギもモルモットも犬も猫も、全部飼っていたような自然でした。伝書鳩も三十羽ぐらいいて、すぐ上の兄と熱中して「勉強しない」と母親からよく叱られました。

このように豊かな自然に恵まれた、じつにのんびりとした、平和なくらしのつづく町でした。

ところが、わたしが生まれた昭和六年は、満州事変が勃発した年です。翌年には第一次上海事変が起き、満州国が建国されるなど戦争への不安な影がしのびよっていました。

昭和十二年、小学校に入学した年の夏には、日中戦争がはじまりました。その年、わたしの兄は中国へ出征して、海岸線から六百キロ以上も奥に入った長沙というところまで進軍していました。その兄に宛てて、手紙や兵士

昭和二十年八月六日

を励はげますため日用品などを入れた慰問袋いもんぶくろを送った覚えがあります。

四年生の十二月八日には、つ

いに太平洋戦争がはじまりました。

た。真珠湾攻撃しんじゆわんこうげきの臨時ニュース

を小学校の教室で聞いて、子ども

もながらも非常に興奮こうふんしたことを

覚えています。

そして、昭和二十年の八月六

日がやってきます。

広島に原爆げんばくが投下とうかされたとき、わたしは広島修道中学しゅうどうの

二年生でした。

